「言語能力」の育成を目指す指導法の研究
－「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤にした授業づくり－

愛知淑徳大学文学部教育学科
中　嶋　真　弓

1. はじめに

中央教育審議会は令和３年「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」（答申）（以後、「答申」と記す）を発表した。「答申」には、次のようにある。

○基礎的・基本的な知識・技能等や言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である（p. 17）。

○以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である（p. 18）。

○さらに、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である（p. 18）。

○「協働的な学び」においては、集団の中で個が埋没してしまうことがないよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ、子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。「協働的な学び」において、同じ空間で時間を共にすることで、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要がある（p. 18）。

平成 29 年に告示された『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編』において「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改革の中で「児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組まれ蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はない」（p. 4）とある。また、「答申」においても、「従来の社会構造の中で行われてきた『正解主義』や『同調圧力』への偏りから脱却し、本来の日本型学校教育のもつ、授業において子供たちの思考を深める『発問』を重視してきたことや、子供一人一人の多様性と向き合いながら一つのチーム（目標を共有し活動を共に行う集団）としての学びに高めていく、という強みを最大限に生かしていくことが重要である」（p. 16）、「同じ空間で時間を共にすることで、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要がある」（p. 18）とある。すなわち、新しい教育方針は、今までの教育に立脚したものであり、その成果をより向上させることと、まだ弱い部分を課題として明らかにして確かなものにしていくことが求められているといえる。「改めて認識」とあるように、今まで行ってきた教育活動において成果と課題を教師一人一人が自己の指導の在り方から明確にし、何をすればよいかを意識的に実践していくことが求められているといえる。人間は、できなかったことに目が向きがちであるが、何ができたか、なぜそれができたのかを問い、

そこから新たな指導も生まれてくると考えている。

本稿においては、「子供一人一人に学力を付けているか」、「仲間と高め合っているか」を教師自身が常に意識しながら授業を行うことが重要と考え、第 4 学年と第 6 学年の授業を構想した。「子供一人一人に学力を付けているか」においては、そのために、先ず学ぶ喜びを味わい、自分の学びを自覚できるようにすること、「仲間と高め合っているか」においては、先ず、仲間と学ぶ楽しさを味わい、共に学ぶよさに気付くことができるようにすることが大切だと考え、次のような学習を構想した。

授業を構想するにあたって、教材として光村図書出版の『国語 四上 かがやき』と『国語 六 創造』を使用した。

2. 自分の考えを伝えるために情報を取捨選択、活用する学習
～4 年生教材「アップとルーズで伝える」の学習を中心に～

〔単元名〕筆者の考えをとらえて、自分の考えを発表しよう(光村図書『国語 四上 かがやき』)

〔教材名〕アップとルーズで伝える　　◇じょうほう　考えと例

〔本単元のポイント〕

A. 筆者が自分の考えを読者に伝えるために、どのような工夫をしているかを捉える。

B. 多様な観点から物事を見たり、考えたりすることの大切さ、楽しさを知る。

C. 自分の伝えたいことが相手に伝わるようにするためにどのように情報を駆使し、表現すればよいかを考える。

なお、下記の①等の番号は、参考として配当時間を示したものである(以下同様)。

【学習過程】

⑴ 本単元のポイント A・B の学習

①・「アップでとったゴール直後のシーン」の写真(教科書に載せてあるもの)を見せ、どのようなシーンか、どのような様子かを出し合う。

＊児童は、この写真から分かることを中心に出してくると同時に、想像できること、例えば、「得点したからうれしい」、「喜んでみんなの所へ行こうとしている」、「(この後)ガッツポーズをしたかも知れない」等々を出してくると考えられる。児童が出してきた意見を教師は、簡潔に板書しておく。これらの意見が、読者が知りたい内容につながるからである。

・「勝ったチームの応援席」の写真(教科書に載せてあるもの)を見せ、どのような様子かを出し合う。

・この二枚の写真を提示するよさについて話し合う。

＊各自で考えをまとめた上で共有する。

②③・本文を読み、筆者がアップとルーズについてどのように説明し、何を読者に伝えようとしているかを捉える。

④⑤・筆者が、自分の考えを伝えるために、どのような工夫をしているかを捉える。

・今まで他教科も含めて、アップとルーズのようなことを考えたり、経験したりしたことがあれば出し合う。

＊ここでは、多様な観点で見ることや視点を変えて見ることの大切さや楽しさを味わわせたい。そのために、例えば、「家族でテレビを見ているとき、みんな笑顔だった」とか「うちのチロは、しっぽを振るとき○○だけど、隣のミクは○○」というように、アップやルーズにとらわれないで、比較した見方等の意見も出させていく。

⑵ 本単元のポイント C の学習

⑥・友達に伝えたいことを写真や絵を活用して文章に書く。

＊欲しい写真がない場合は、自分で絵に描いてもよいことを伝える。

＊児童は、この学習によって、アップとルーズが分かる二つの情報を提示してくると考えられる。

⑦・友達に自分が伝えたいことを先ず口頭で伝えてから、文章化したものを写真や絵を見せながら読む。

＊本稿では、先に口頭で自分の伝えたいことを話すようにしているが、文章を読んでから友達に何が伝えたかったか分かるかを尋ねてもよい。ここで、先に伝えたいことを話すのは、次に記す活動が効果的に機能するためである。

・友達の伝えたいこと、そしてその文章化したものを聞いて、理解できたかどうかを話し手である友達に伝える。

・「さらにこんな情報を入れるとより分かりやすい」とか「私はこんなことも知りたい」等の意見があれば話し手である友達に助言する。

＊友達が伝えたいことを先に聞くことによって、聞く観点が明確になり、相手に評価を伝えやすいよさがある。また、先に聞くことによって、「こんな情報があるとさらによい」の助言も漠然としたものではなく、友達の主張がより分かるための情報という情報の焦点化ができ、情報の価値を考えることにもつながる。

⑧・友達の助言を生かして、文章を推敲し、お互いに読み合い、相手の考えを理解し合う。

3. 多様な見方や考えがあることの楽しさを知るための共有学習
～6 年生教材「『考える』とは」の学習を中心に～

〔単元名〕筆者の考えを読み取り、テーマについて考えを述べ合おう（光村図書『国語 六 創造』）

〔教材名〕「考える」とは

〔本単元のポイント〕

本教材は、「考える」という抽象的な概念を扱っている。児童にとっては難しいテーマといえるが、一方で興味深いものでもある。そこで、本教材では、特に仲間との共有や新たな情報から、「色々な見方や考え方をすることが大切だなあ」、「友達は、そのように考えていたのか」、「自分とは違うなあ」と思わずつぶやくような学習ができるとよいと考えている。

A. 筆者の「考え」における見方や考え方を捉える。

B. 多様な観点から物事を見たり、考えたりすることの大切さ、楽しさを知る。

C. 自分の考えと友達の考えを共有する。

【学習過程】

⑴ 本単元のポイント A・B の学習

①・「意味マップ」を活用して、「考える」とはどのようなことかを書く。

＊「意味マップ」とは、「中心となるトピック語を選択し、これを図の中央に書き、丸で囲む。次にこのトピックに纏わる情報を整理するために幾つかのカテゴリーを放射状に表示する。それからこれに詳細な情報を付け加えていく」（塚田泰彦(1989), pp. 76-77）ものである。

・「意味マップ」をもとに、自分なりの「考える」の捉えを簡単な文章にまとめる。

・書いた文章をグループで共有し、お互いの考えを知る。

＊ここでの話し合いは、小学生同士ということもあり、同様の考えが出されることが予想される。これは、抽象的な内容での話し合いということもあり当然のことと考えられるが、ここでの話し合いは、先ず自分の考えをもつ段階と捉え、話し合いの場を設定する。

＊グループの話し合いを「意味マップ」を活用して、記録していくようにする。

⑵ 本単元のポイントA・B・Cの学習

①②③④・教材を読み、三人の筆者の「考える」におけるそれぞれの考えを整理し、その「考え」についての自分の意見を書く。

・書いたものを学級全体で発表し、共有する。

＊教材では、色々な立場、職業、状況からの「考える」における意見や考え、思いが述べられている。そのために、小学生同士で話し合った後に、本教材を読むことによって、多様な見方や考え方をするよさや楽しさに気付かせていきたい。

⑤・インターネットや書籍で、「考える」ことがテーマになっている文章を探し、読む。

＊説明的な文章だけでなく、小説、詩、短歌や俳句、社説、漫画等も含めた多様な材料から資料を集めるよう働き掛ける。

⑥・各自が見付けた「考える」ことがテーマになっている文章を、お互いに内容をグループで説明し合い、自分の考えや感想を共有する。

＊本来話し合うことにおいては、話し合いの質も問題になってくるが、本教材においては、多様な見方や考え方があることを知る、そうしていくことがより自分の考えを広め、深めるという実感を味わわせるために、色々な考えを出すことに焦点を当てることとする。

＊本学習の継続、発展として、自分たちで考えてみたいテーマを学級、またはグループで決めて休み時間や家庭学習を活用して資料収集や資料の読みを行い、国語科としてはA領域の学習としてそのテーマでお互いの考えを共有し合うことも可能である。

＊地域の方や教員、異学年の児童を招いて、テーマ設定をして、話し合いをしてもよい。その場合、テーマ設定も重要になってくるために、児童に考えさせたい。

＊さらに、このテーマ追究学習を生かして、例えば「学級とは」というテーマで学級活動の時間を活用して話し合い、学級づくりに役立ててもよい。

4. おわりに

本稿では、「子供一人一人に学力を付けているか」、「仲間と高め合っているか」を教師自身が常に意識しながら授業を行うことが大切であるという考えのもとで、一人一人の情報活用能力の育成を目指した「自分の考えを伝えるために情報を取捨選択、活用する学習」と、よい学びを生み出すための「多様な見方や考えがあることの楽しさを知るための共有学習」を構想した。子供たちが主体的に学習に取り組むために、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させる必要がある。そのために、今後さらに教育内容を厳選し、どのような言語活動を行っていくのかを発達段階を踏まえながら系統的、螺旋的に考えていきたい。

参考文献・引用文献

甲斐睦朗他49名(2024)『国語 四上 かがやき』光村図書.

甲斐睦朗他49名(2024)『国語 六 創造』光村図書.

塚田泰彦(1989)「読みの事前指導における意味マップの活用法について」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第36集, pp. 75-82.

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版.